

資料館だより

第 10 号

昭和63年 7 月 20 日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市本町5-21-1 TEL 0425(60)6620



展開写真



吉祥山遺跡
7号住居址炉埋設土器

特別展示 「武蔵村山市の原始・古代」

期間 1988,7/24～9/25

1. はじめに

武蔵村山市の北に広がる狭山丘陵は、青梅を扇頂とする広大な武蔵野台地の北西寄りに位置し、東西に長いラクビーボール状の形態を成す。

この狭山丘陵には、湧水が多い。そして、その湧水を求めてか、原始・古代の遺跡の数も周辺地域に比べると集中している。更に、中世には武蔵武士団の一つである村山党の本拠地が置かれていたとも言われ、現在では、その地形を利用して東京都民の水ガメである村山・山口貯水池が造られている。

今から約20万年前、それまで海の底であった武蔵野台地が隆起し始め、奥多摩溪谷から流れ出ていた川が多摩川と霞川とに分かれる。そして、この川が氾濫を繰返しながら、この新しく形造られた台地を削る。削られながら台地は更に隆起し続け、現在の武蔵野台地が形成されたのである。このとき、両河川の削り残した部分が狭山丘陵である。そのため狭山丘陵には、かつて、海の底であった頃に形造られた地層が残されており、その一つに谷ツ粘土層がある。そして、この谷ツ

粘土層が湧水形成の大きな要因となっている。

武蔵村山市内にも、狭山丘陵を中心に数多くの湧水が見られ、そしてこれらの湧水が狭山丘陵を削り、複雑に入り込んだ谷戸を形成すると共に、緑豊かな台地と肥えた低湿地と豊富な水を住む人々に提供してくれた。いつの頃か、この湧水を利用して5ヶ所の溜池が造られ、低地に開かれた数少ない水田の一助となっているし、どんな日照でも水が涸れた事が無いとされる湧水池が「ダイダラボッチの井戸」伝説と共に残されている。

武蔵村山市の遺跡は、これら湧水の近くの台地や湧水が源となる河川の流域に分布し、先土器時代から平安時代まで36ヶ所を数える。

今回の特別展示「武蔵村山市の原始・古代」は、これらの遺跡を中心にその出土品等を展示・公開することによって埋蔵文化財保護の重要性を理解いただくと共に、文化財全般に対する保護意識の高揚に努めることを目的としています。

2. 市内に残る遺跡とその時代

(1) 市最古の石器と土器 (第1図)

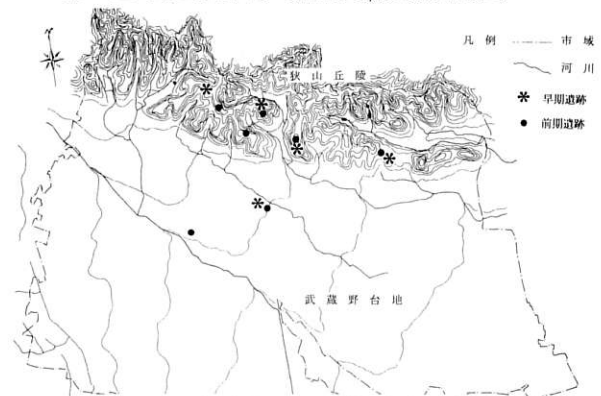
初めて市内に人々が移り住んだのは、先土器時代終末の頃、富士山や箱根山などの噴火が鎮静化し、動植物の繁殖が進む時期である。この時期の石器は、^{せき}石槍・ナイフ型石器 (写真I-1～7) などで、吉祥山遺跡を初めとする市内6ヶ所から発見されている。分布は、武蔵野台地の河川流域を中心に丘陵に掛かる地域である。最古の土器は、石器出現からやや遅くなって現われる。^{よりいと}撚糸文土器・^{おしがた}押型文土器 (写真I-8～19) と呼ばれるこれらの土器は、屋敷山遺跡を代表に市内4ヶ所から出土している。

(2) 尖底土器と平底土器 (第2図)

地球が温暖化し、東京湾の海進が進む頃、市内の遺跡は、丘陵を中心に分布する。当時の土器は底の尖った^{せんてい}尖底土器 (写真I-22～28) が中心で、やや時代が下がって平底土器 (写真I-29～34) が中心となった。尖底土器がファイヤーピット (野外炉) や屋内炉に適していると考えられるならば、平底土器は安定性に富み、床に置くことができる。煮炊き用として出現した土器



第1図 先土器時代・撚糸文期遺跡分布図



第2図 縄文時代早期・前期遺跡分布図

が、その用途を貯蔵用にまで拡大した現われであろう。

(3) 集石炉と環状集落 (第3図、写真II-1~13、III 1~6)

縄文文化の最盛期と言われる中期になると、市内の遺跡は急激に増加し、27ヶ所を数える。分布は、武蔵野台地上に8ヶ所ほど点在するものの主流は狭山丘陵の平坦面や先端部である。

その中でも、中期の代表的集落とされる中央広場の周囲に住居を配する環状集落が造られた大規模遺跡として、丘陵上にある吉祥山遺跡や屋敷山遺跡があげられる。この2つの遺跡では中期全般に渡って生活が営まれ、特に中期後半に環状集落を形成している。

また、武蔵野台地上の遺跡のうち、御伊勢前遺跡から集石炉3基のみが検出され、キャンプ地と推定された。吉祥山遺跡や屋敷山遺跡で生活している人々が御伊勢前遺跡に野営地を置き活動したのだろう。

(4) 縄文文化の終焉 (第4図)

富士山の再噴火や気候の冷涼化の進む縄文時代後期~晩期にかけての遺跡は、内陸部で急激に減少し、海岸部で増加する傾向にある。

市内でもこの時期の遺跡は少なく、後期が5ヶ所、晩期前半が2ヶ所で、その後は弥生時代終末まで遺跡は無く、空白の時代となる。それでも、吉祥山遺跡2号住居址出土の祭祀的遺物は、呪術性の強い社会であったことを証明する好資料(写真III-8~11)であり、この遺跡出土の晩期土器類は、狭山丘陵及びその周辺地域でも数少ない貴重な資料(写真III-12~17)である。

(5) 農耕のはじまりから律令時代へ (第5図・写真IV)

再びこの地に人々が姿を現わしたのは、全国に稲作を中心とした農耕が定着し、豪族権力の象徴としての古墳造りが始まる直前で、弥生時代終末である。この時代の市内の遺跡は、2ヶ所(吉祥山・屋敷山遺跡)と少なく、いずれも小規模集落と推定される。

この細々とした集落も、次の古墳時代になると12ヶ所と狭山丘陵を中心に急増し、縄文中期に次ぐ隆盛期を向かえた。しかし、“古墳”は造られておらず、庶民的な集落ばかりだったと思われる。

しかし、奈良時代になると再び遺跡は無くなり、平

3. まとめに

先土器時代の終末から始まる武蔵村山市の歴史は、狭山丘陵とそこからの湧水に支えられたものであった。先土器時代にはまだ武蔵野台地上を拠点とした人々も、縄文時代から平安時代に至るまで一環して、この自然豊かな狭山丘陵を生活基盤として活動していたことが

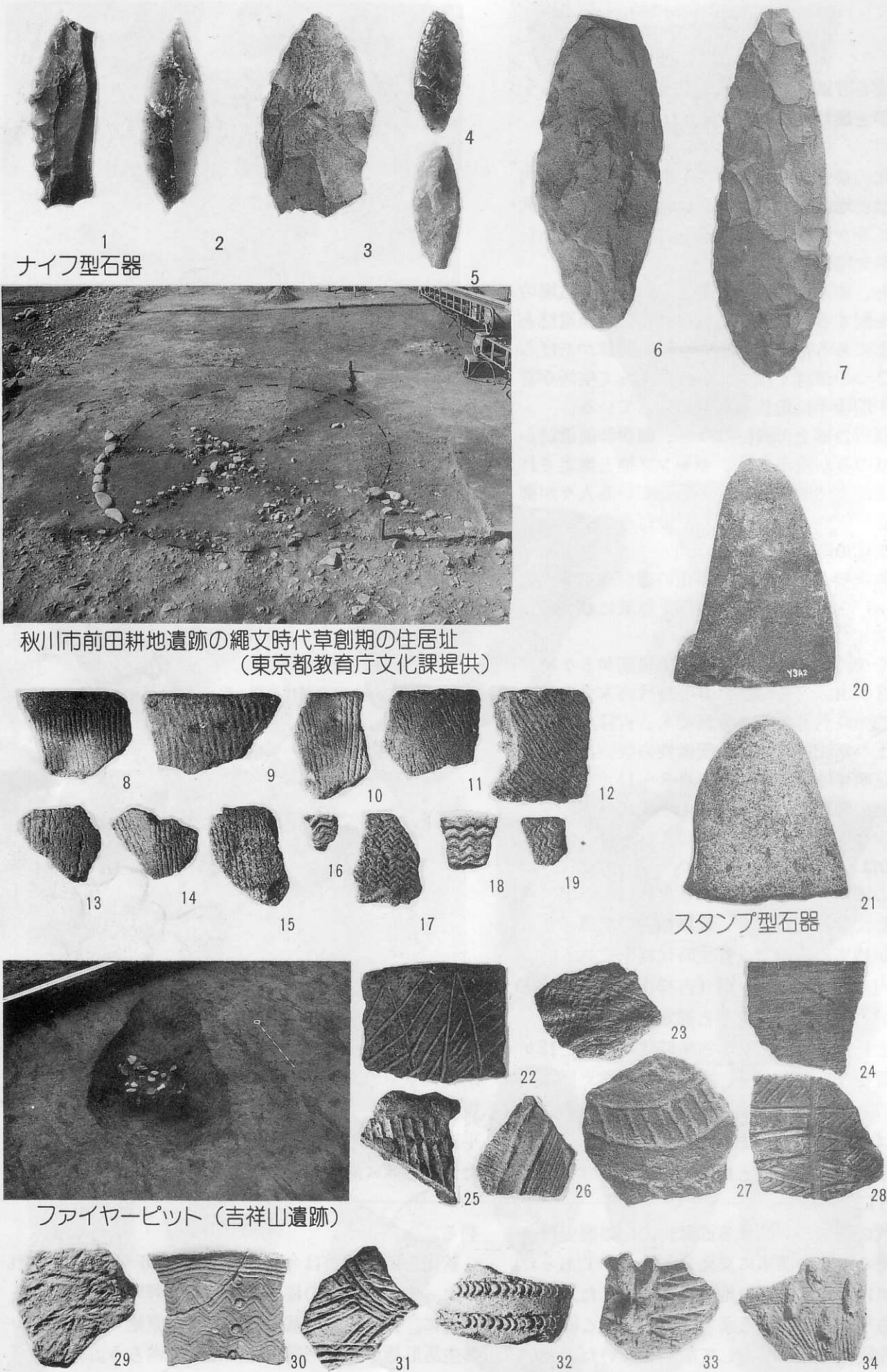


安時代で8ヶ所と盛り返す。奈良時代には律令制が布かれ、水田の開墾等を組織的に行うため、意識的に小規模な集落を1ヶ所に集めた可能性が高い。そして、平安時代になり律令制が崩壊するとともに、人々が、また元の地域に戻ったと予想される事例である。

判る。

狭山丘陵の遺跡は今後、増加する傾向にある。それによって、各時代の様子が少しずつ解明されていくとともに、狭山丘陵を基盤としてきた原始・古代の人々の生活形態がより一層明確になるであろう。

写真 I



ナイフ型石器

秋川市前田耕地遺跡の縄文時代草創期の住居址
(東京都教育庁文化課提供)

スタンプ型石器

先土器時代

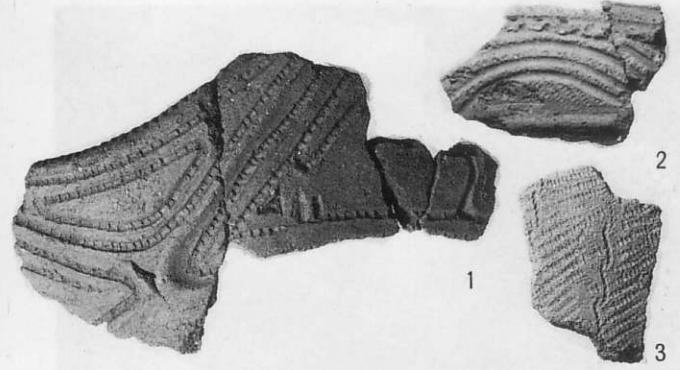
(草創期)
縄文時代

(早期)

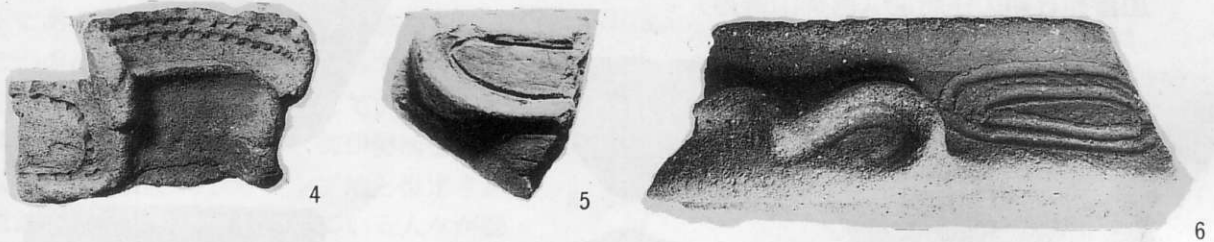
(前期)



集石炉 (御伊勢前遺跡)



縄



(中期)



勝坂期住居址 (吉祥山遺跡)



時



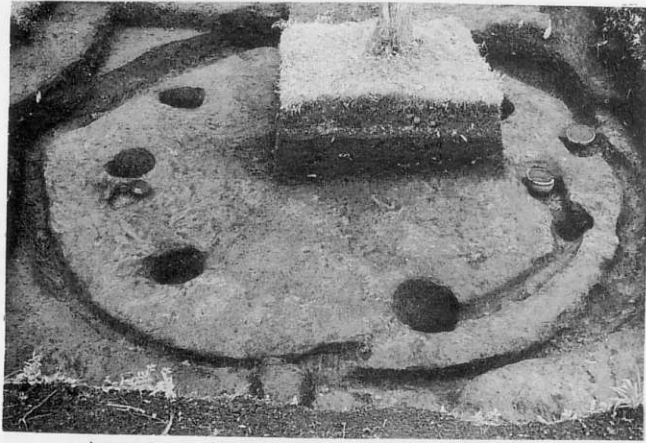
埋甕炉 (吉祥山遺跡)



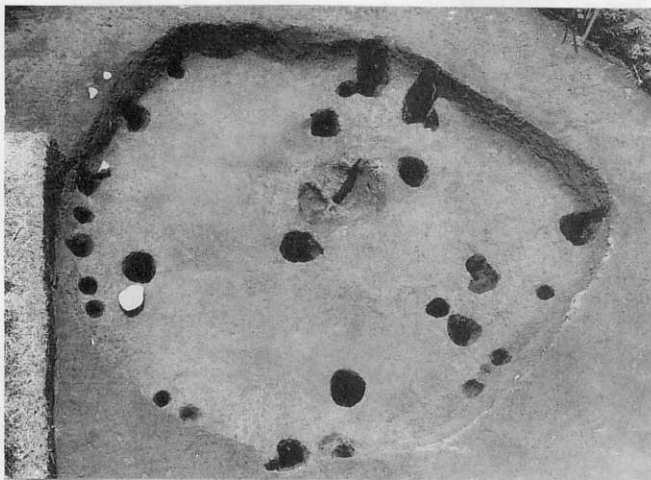
代



写真Ⅲ



加曾利E期の住居址（吉祥山遺跡）

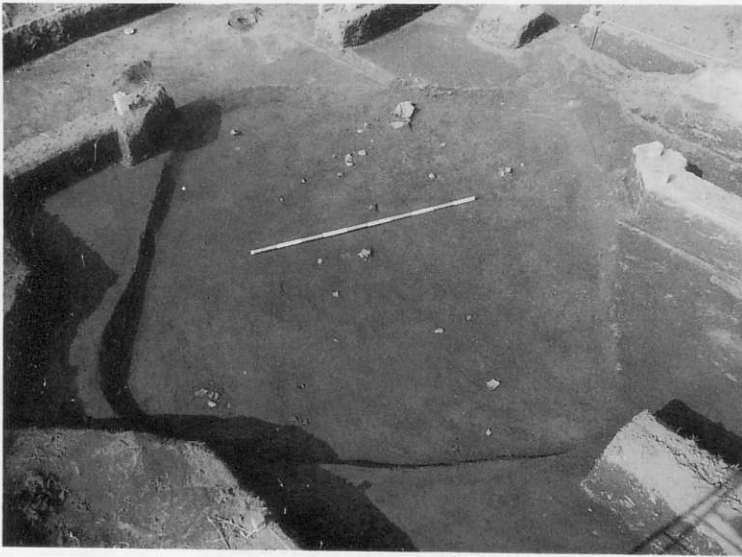


縄文時代後期の住居址（吉祥山遺跡）



(中期)
縄文時代
(後期)
(晩期)

弥生時代

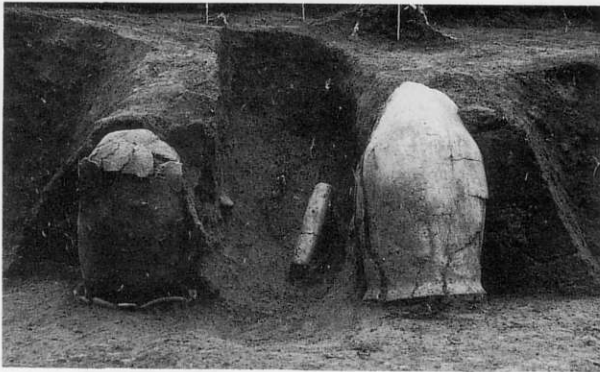


弥生時代の住居址（吉祥山遺跡）

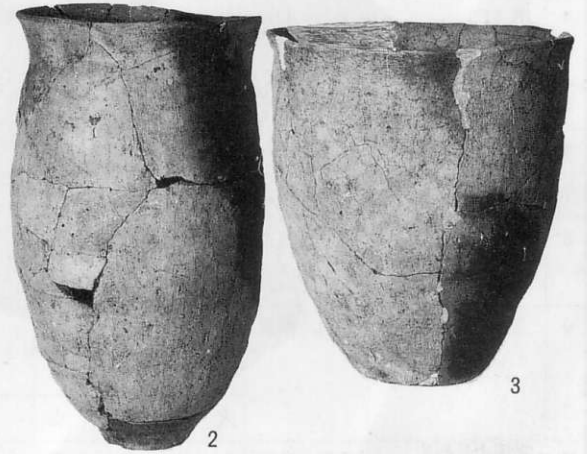


弥生時代の土器

古墳時代



古墳時代の住居址カマド（吉祥山遺跡）



古墳時代の土器と土製支脚（11）

奈良・平安時代



平安時代の土器

平安時代の鉄器

寄贈資料

(昭和62年4月1日～昭和63年3月31日)

次の方々より貴重な資料を御寄贈いただきました。ありがとうございました。

区分 番号	寄贈者		寄贈品		備考	区分 番号	寄贈者		寄贈品		備考				
	住所	氏名	品名	数量			住所	氏名	品名	数量					
1	三ツ木 1384	田代年太郎	脱穀機	1点	モーター付	11	岸 357	荒畑 忠雄	タンス	1点					
			麦乾燥機	1点					掛軸	19点					
2	残堀 5-25	福島 庄治	コンロ	1点	五月人形				2点						
			3	中藤 3-75	高橋 正男				火鉢	1点		ひな人形	1点		
コワク	4点	羽子板							1点						
オシキリ	2点	モグラ取り器							2点						
千歯	1点	角火鉢							1点						
杵他	39点	キリダメ							5点						
4	岸 415	福井 利光	看板	2点	醤油屋					12		三ツ木 1230	野島 敏治	ホウロク	1点
			杉戸	6点	樽池									74点	
5	神明 3-15-1	峯岸 トク	石仏台座	1基					オヒツ					2点	
6	岸 361	荒田光太郎	竜吐水	1点		高足膳	29点								
7	中藤 1-37-1	真福寺	絵馬	6枚		ユトウ	2点								
8	三ツ木 649	山崎 典雄	脇指	1振		掛軸	10点								
			槍	1振	盃台	2点									
9	三ツ木 1177	木村 法男	張り板	2点		表具箱	2点								
			エブリ	1点	銅壺	1点									
			火鉢他	7点	ヒャクマワシ	1点									
10	立川市高松町 1-11-1	岡野 映子	古文書	1点		湯飲茶碗他	41点								

資料館利用状況 (昭和62年4月1日～昭和63年3月31日)

(1) 利用状況

(2) 参考 (市外利用者の状況)

区分 月別	開館日数	利用者数	市内		市外		区分 月別	市外 利用者数	三多摩地区		23区		都外他	
			人数	割合	人数	割合			人数	割合	人数	割合	人数	割合
S 62. 4	24 日	1,423人	711人	50.0%	712人	50.0%	S 62. 4	712人	453人	63.6%	105人	14.7%	154人	21.6%
5	24	1,566	653	41.7	913	58.3	5	913	303	33.2	145	15.9	465	50.9
6	19	876	601	68.6	275	31.4	6	275	169	61.5	46	16.7	60	21.8
7	26	1,432	798	55.7	634	44.3	7	634	357	56.3	154	24.3	123	19.4
8	25	2,081	1,137	54.6	944	45.4	8	944	599	63.5	146	15.5	199	21.1
9	23	851	409	48.1	442	51.9	9	442	286	64.7	54	12.2	102	23.1
10	25	1,045	610	58.4	435	41.6	10	435	302	69.4	73	16.8	60	13.8
11	22	1,226	540	44.0	686	56.0	11	686	518	75.5	84	12.2	84	12.2
12	22	560	358	63.9	202	36.1	12	202	135	66.8	36	17.8	31	15.3
S 63. 1	22	815	566	69.4	249	30.6	S 63. 1	249	169	67.9	32	12.9	48	19.3
2	22	1,005	632	62.9	373	37.1	2	373	246	66.0	47	12.6	80	21.4
3	25	1,472	814	55.3	658	44.7	3	658	477	72.5	72	10.9	109	16.6
合計	279	14,352	7,829	54.5	6,523	45.5	合計	6,523	4,014	61.5	994	15.2	1,515	23.2